

日台学術交流会 講演

2019年6月9日 15:00～

拓殖大学理事長 福田勝幸

こんにちは。ただ今ご紹介いただきました拓殖大学理事長の福田勝幸と申します。本日は、本会開催のため準備万端整えていただいた宜蘭県史館廖英杰館長はじめ地元宜蘭の関係者の皆様、西郷菊次郎のご子孫であります西郷隆文様、諫山尚子様ほか、日台交流に心ある有志の方々の参加を得て、このような意義ある交流の場を持てましたこと、誠に光栄に存じます。

本会の主催者を代表して、本会開催に至った経緯と本会の趣旨について、ご説明申し上げます。

まず簡単に本学拓殖大学の成り立ちについてお話します。

本日、コメンテーターとしてご参加されております郷土史家の李英茂先生は、かつて「台湾なければ拓殖大学は存在しない」という名言を残しております。まさに李先生のおっしゃった通り、本学拓殖大学は、今から119年前の西暦1900年、台湾の開発に従事する日本人青年を養成するために創設されました。当時の校名を台湾協会学校と言います。台湾協会が設置した学校ということです。一般には台湾学校と呼ばれておりました。

拓殖大学の前身であるこの台湾協会学校を設置、経営した台湾協会は、日台の交流、特に人的交流を促進するための民間団体でした。初代会頭は桂太郎。その桂太郎が、台湾協会学校の初代校長でもありました。ご存知のように桂は、第二代台湾総督を勤め、のちに総理大臣となりましたが、総理大臣在任中もずっと本学校長として、親しく学生を指導しておりました。

その後、台湾協会は、交流の輪をアジア全域に拡大して、名称を東洋協会と改め、それにともない本学卒業生の活躍の場も台湾ばかりでなく、朝鮮半島や中国大陸、南洋諸島に広がっていきました。しかし学校の経営、教育には、その後も、台湾とゆかりのある人物が多く関わっております。第三代校長の後藤新平は元

台湾総督府民政長官として台湾の近代化に貢献しました。また第二代学監の新渡戸稲造は、同じく台湾総督府の臨時台湾糖務局長として台湾糖業の発展に尽力しました。西郷菊次郎もまた、そのように台湾との縁により本学に関わった一人です。

西郷菊次郎が台湾に赴任したのは 1895 年 4 月。1897 年 5 月に宜蘭庁長となり、1902 年 11 月に退職、帰国しておりますので、本学第 1 期生が 3 年間の学業を終えて台湾に赴任するのは、菊次郎が台湾を去った翌年からでしたが、当地宜蘭にも、宜蘭庁をはじめ、5 人の卒業生が赴任しております。台湾全体で見ますと、第 1 期生から第 36 期生まで本学卒業生約 400 人が台湾で活躍しておりました。

その後、京都市長となった菊次郎は、1910 年に東洋協会の評議員となり、本学の経営に関わり、二人の息子を拓殖大学に学ばせました。すなわち次男の隆治と三男の隆秀です。隆治は、1920 年に入学して、翌年には菊次郎の命によってブラジルに渡航しますが、隆秀の方は、1925 年 4 月に入学、1931 年に卒業し、のち四半世紀を経た 1955 年から 10 年にわたり本学理事長を勤めました。

拓殖大学は 2000 年に創立百周年を迎え、それを期に台湾との交流を深める一環として、2001 年 12 月、本日と同じこの場所、宜蘭県史館の講堂で「宜蘭と菊次郎 国際シンポジウム」を宜蘭市と共催しました。拓殖大学からは前理事長の藤渡辰信や、『西郷菊次郎と台湾』の著書でもあります元常務理事の佐野幸夫等が参加しております。李英茂先生は「目覚めよ 百年の眠り——西郷庁憲徳政碑を探る」の題目で基調講演をされました。

お陰様で本学は来年 2020 年に創立 120 周年を迎えます。本学では、その記念事業の一つとして、昨年 11 月から今年 2 月まで、学内において、西郷菊次郎と隆治、隆秀ゆかりの資料の展示を行いました。主に諫山尚子様から本学に寄贈された資料と、西郷隆文様からご提供を受けた資料です。展示会のテーマは「地の境を越えて」としました。これは本学校歌の一節「人種の色と地の境 我が立つ前に差別なし」から採りました。菊次郎の志が、本学国際交流の命脈として今も

本学に受け継がれていると考えたからです。ちなみに本学の校歌は1919年に制定されました。

今回、日本での展示会に加えて、西郷菊次郎ゆかりの地である宜蘭において、学術研究の視点から改めて菊次郎の生涯に光を当てることができますことを、無上の喜びと感じております。

また、本学が創設以来関わってきた宜蘭のみなさまと今後ともさまざまな形で交流を重ねていきたいと、切に願う次第です。

なお、李英茂先生はこのたび、日本・台湾間の相互理解の促進に寄与した長年の地道な活動を評価され、春の叙勲において旭日双光章を受賞されました。この場をお借りして、改めて祝意を表します。

本日は、ご出席いただき、誠にありがとうございます。

(以上)